

不便を楽しむ

早稲田佐賀中学校

板垣仁菜

私の曾祖母は、いわゆる田舎町に住んでいる。バスは一日朝夕の二本だけで、停留所までは、九六歳の足には現実的でない距離が待ち構えている。命の綱は、その区域に唯一のスーパーが握っており、そのスーパーがなくなれば車の運転のできない曾祖母は生活できなくなるに違いない。一方、私達は、人口百万人を超える大都市に住んでおり、いつも曾祖母にこちらに越すよう説得するのだが、曾祖母は頑なに拒むのだった。

この夏、大きな台風が来て、そんな曾祖母の古屋の屋根が一部吹き飛んだと連絡があった。雨漏りしていると聞いて、我が家は慌てて、と言っても、四時間以上かかるのだが、すぐに曾祖母の住む町に向かった。

曾祖母の家に到着すると、すでに先客があった。中から箒や落ち葉がいっぱいのごみ袋を抱えた女性と男性が出てきて、出迎えてくれた。同じ町の住民らしく、先に曾祖母の家の片づけを手伝ってくれていた。さぞ大変なことになっていると心配していたが、私の予想を裏切って、顔色もよく、にっこりと上機嫌に曾祖母が現れた。

「おばあちゃん！ 大丈夫？」

私の悲痛な声に、曾祖母は大笑いして、頷いた。

「そんな心配せんでもよかったに、おおきに、心配かけたねえ。」

と元気そうに答えてくれた。

そうして、長旅が疲れたろうと、私達においでおいでするので、古家に入ると、信じられないほどのごちそうが並んでいた。

「どうしたの？ おばあちゃん！ こんなにたくさんの食べ物、一人で作ったの？」

私が驚くと、今朝のことを話してくれた。

この町にすむ数少ない若い人が年寄りの家を周り、被害にあった家が判ると、近所の人達がご飯や水を届けてくれたらしい。まだ町のスーパーも開く前だったから、各家の晩御飯の残りやおにぎりやみそ汁など、沢山の食べ物が届けられた。また、頼みの綱のスーパーが開くや否や、ビニールシートや紙コップなどを購入して町の人が届けてくれたという。私は、この町の団結力に

驚くばかりだった。そういえば、以前に曾祖母が風邪で寝込んだ時も、近所の人が夕飯を届けてくれたことがあった。私の住む都会で、熱をだしたとして、誰がいったい食事を他人に提供するだろう？私は、ここが本当に同じ日本なのかと信じられない思いだった。

曾祖母の家にまるで、来賓のように招かれた私の目の前には、コンビニでは見たこともないお菓子が並んでいた。栗の形をしたほろほろと崩れるお菓子や黒棒とかかれた軽い板みたいなお菓子、カラフルなゼリーみたいな餅、これらの古めかしいお菓子は近くのスーパーの人気商品だというのだ。私は生涯自分で選びそうにないお菓子を恐る恐る口にいれと……。これが、意外と美味しかったのだ。

それから、曾祖母と過ごした数日は忘れられない。ご自慢のスーパーにいくと、簡単な衣服が食料品売り場の真隣に売られている。曾祖母のサイズのズボンといえば、三種類ほどしかない。店員と一緒にズボンを選んだ曾祖母は、大満足の様子だった。

お菓子の棚には、曾祖母の家で振舞われた品々が所狭しと並んでいた。確かに人気商品らしい。なんとも見慣れない光景だったが、私にもスーパーに大事な用事があった。学校の週末課題のために、コンパスが必要だったのだ。店員さんに尋ねると、どこかにあったはずだと教えてくれた。ああでもない、こうでもない、と、店員総出でコンパス探しの騒ぎが始まった。当然レジは止まっているし、遂には客まで捜索に協力してくれた。手狭なスーパーの店員と客すべてを巻き込んで、「壮大なコンパス捜索大作戦」は発動され、棚の隅からひとつだけ見つかった時には、歓声すら上がった。なんの変哲もない、なんの飾りもない、少し箱は古びたコンパスだったけど、みんなの笑顔と曾祖母の目じりの下がりきった笑顔を見て、私はなんともいえない、温かな気持ちになった。コンパスを片手に英雄のように見送られながらスーパーを後にした。私はかつてない宝物を手に入れたような大満足の気分で、曾祖母と二人で満面の笑みを浮かべて帰宅した。曾祖母がこの町にこだわる理由が少しわかったような気がした。

数日後、私達はいつもの日常に戻った。年中、渋滞が絶えない大通りにくると、「ああ、またいつもの我が家に戻ってきたか」と実感する。横断歩道に人は絶えず、油断すると自転車にひかれそうにもなる。部屋の窓を開けると、遠くなる車のクラクションの音や車の急ブレーキ音が聞こえた。そういえば、曾祖母の家では、虫の音がしていたのだな、と今頃気づかされた。

デパートには、目新しい、派手な装飾の文具が沢山売られている。私もかつて外国製の珍しいペンケースを大事にしていたが、どうにも、あの日以来、色あせて見えるのだ。都会では、お金を払うなら何でも欲しい物が手に入る。ネットを使えば、さらに種類豊富な品々から選ぶこともできるだろう。玄関を出れば、すぐに大勢の人とすれ違うし、バスや電車で待たずにどこへでも行ける。しかし、何を購入しても、誰とすれ違って、あの日のような感動がない。何か空虚な思いがして、人波がモノクロの映画のように見えるのだ。

私の携帯には、あの日の曾祖母の写真がある。曾祖母の新しいズボンをみると、やっぱり胸が温かくなる。私の机上では、あの日のコンパスがさんさんと光輝いていた。

私はまた、来月、曾祖母を訪ねることにした。かけがえのない何かに惹かれているのだ。それは、あの町に行けば出会えるのだ、ほんの少しの不便さと引き換えに。

(福岡県福岡市)

【無断転載を禁ず】